

嬉泉の新聞

嬉泉の新聞／第11号／1988年（昭和63年）11月1日発行／発行所＝社会福祉法人・嬉泉〔東京都世田谷区船橋1-30-9（〒156）TEL03-426-2323・千葉県君津郡袖ヶ浦町下新田1680（〒299-02）TEL0438-62-9121〕発行人＝石井哲夫／編集人＝友田 篤

10年一昔

小野双葉

もう10年になるんですね。袖ヶ浦のびろ学園が開設されて…… 私には、ついこの間のことのような気もしますし、遠い昔のことのような気もします。

房総半島の広大なキャベツ畑に福祉施設ができる！ 初めてあの土地の上に立った時の複雑な気持ちは、今でも忘れられません。

畑の真ん中に立たれて、今は亡き須藤晃弘理事長が「関東一円歩き回って、いろいろな土地を見て回ったが、ここが一番良い土地だ。これだけの広さをまとめて手に入れるのは苦労だったよ。」としみじみおっしゃったお姿が偲ばれます。今は天国でじっと、須藤福祉センターの活動を見守ってくださることと思います。

建築が始まると同時に、袖ヶ浦のびろ学園で働く職員達は、他の施設の視察研修、関係官庁との施設開設に当たっての手続き、備品調達等、毎日、子どもの生活研究所の会議室を根城に動き出しました。

入園が決定していた子ども達は、長時間の宿泊指導に慣れるため、毎週2泊3日、マイクロバスで南伊豆子どもキャンプへ行きました。10月になって泳いだ誰もいない海の静かできれいだったこと、身体が冷えて暖まった

焚火で干したズボンを焦がしたこと、私には何もかも楽しく懐かしい思い出になりました。

施設が開設されるまでは誰の胸も、新しいことへの期待と不安でいっぱいだったと思いますが、昭和52年12月、それまでの数年間、原宿のびろ学園に通園していた7名の子ども達との施設生活が始まってみると案ずるより生むが安し、合宿の延長のようスタートはまあまあ感じでした。

しかし、翌年になって毎月、新しい子ども達がどんどん入ってくるやいなや、施設中、あっという間に雰囲気が変わりました。食事のこと、入浴、睡眠、着替えのどれをとっても、一人ひとりの子どもに手がかり、職員がいつも個別に対応することが出来ず、子どもも大人も落ち着かず大変なものでした。

開設されて10年、すっかり生活のリズムも整い、新しくひかりの学園をはじめ、あの広い土地に沢山の建物が建ち並び、桜の幹の太くたくましくなった今、私は改めて10年一昔と昔の人はよくも云ったものと感慨にひたっております。

これから10年先、また一段と飛躍発展することを楽しみにしております。

（袖ヶ浦のびろ学園初代園長）

施設経営の基本は、何と云っても人材の養成である。よい人材を養成するためには、その養成の基となるよい人材についてキチンと定義をしておかなければならない。私の所で育った人材は、必ず外において男女共自立して、仲々面白い思想や実践を示している。外に出た人間は「石井のやっていることぐらゐ簡単に来る」と思っていたり「石井のやれないことをやってやろう」などと思っているようである。事実私に反撥して辞めた人もいるが、面白いもので何年かたつと、反撥も消えて仲間づきあいを始めたり、競争したりする。肝っ玉の小さい者は、何となく陰でコソコソしている。世をすねている手合いであり、本人は面白おかしくやっていればそれでよいが、「石井の偽物」のような商売をはじめている。困っている親を相手に、理論も目標もなく、集めて集金しているのでは、困ってしまう。

この仕事で大切なことは、一人占めしてやることでなく、仲間と組織を作ることが大切なのである。一人の人間のやれることは知れたことである。仲間が集り、人伝てに新しい情報が伝えられ、そして新しい仕事が生れてくるのである。

民間の社会福祉施設の問題性は、一人の人間の弱さがあるいろいろな形をとって現われてくることである。とくにワンマンになれる初代経営者は、組織性を失うと、専横になつたり、我儘になつたりするのである。戦後、素晴らしい施設経営力を示した人は、何人もいるが、私の知る限り、糸賀一雄にしても登丸福寿にしても、役人上りで、それなりの哲学をもっていた。役人時代の組織感覚がよく活かされた

施設経営の創造性

(その2)

石井哲夫

たちの仕事については、その人たちに委せておかなければならないのである。とすれば、当然、その人たちに、自分の考えを実現して貰わなければならぬ。しかも、それがただ言われる通りにやりさえすればよいと言うものでもない。その人なりにしっかりとした自立的な態度で意欲をもってやっても、この矛盾した考え方に押しつぶされないようにやる人たちは大変なのであり、「何くそ」と反撥して

私の仲間の一人であった。彼は、私の命令で私から離れ一城の主となった。そして自立してよい仕事を沢山やってくれた。

彼なりに人を育て、組織的に人を活かす仕事を発展させて来ていた。私のところにあつては、私の片腕ともなり、多くの先輩女子とも上手くやり、しかも自立的であつた。組織は人に求め、人を育てるといふことが如実に示されたのであつた。彼は私と本音で話も出来、心から私を大事にしてくれた。死んだ子の年を数えるようなことはやめて、私も小林の後継者を沢山作っていかなければと心に決めている此頃なのである。

さて、今私は、何を大切にして、人を育てているのだろうか。よく奥村さんは、「先生は、ガキ大将だったから出来るのよ。」と私の苦心もわからずにニべもなく言い放つ、私の人に対する頼り方や叱り方が上手だと言うのである。本当にそうか自分では全くわかっていない。ただ、いつもわたしはムキになって職員とむきあつているし、人々と一緒に話あつたり、酒をくみ交したりすることが大好きである。そして志を一つに持つ仲間をしきりに求めていることは確かだと思つている。

ひかりのタイムス

独立第5号

のびろ十周年を ふりかえる

山岸 裕

はやいもので、『のびろ』も、十周年を迎えました。この間園生として過ごして来た訳ですが、ふりかえてみると、色々なことがありました。(注 成人施設ひかりの学園時代も、ふくむ)

最初のびろに、入った頃は、新しい環境にとまどっていました。しかし、私の場合、東京の、デ・ケアーの通園施設にかよっていた時の先生が、引きつづき『のびろ』でも勤務する事になったので安心と信頼感がありました。

しかし、親元から、離れて他人と共に集団生活を過ごすという事は、いままでも、家で、気ままに生活してた、私にとってカルチャーショックでした。それも、先生の暖かい愛情で、じきに施設の生活に慣れていきました。

施設生活二年目になる、私は、アメリカに、十五年も暮らしてい

た学園の先生 愛称「ミスター」という人の指導をうける事になりました。それは、軽度の自閉症の青年たちを、集めたグループ『青年部』です。

ここでやった事は、千葉県の各地をドライブしたり、博物館 美術館巡りをしたり、する。それは、学園で過ごす毎日が楽しかった。

「ミスター」という人は、型破りの明るいい人で、愉快な先生だった。「人生は楽しく」というのがモットーで、私はこの人から人生を教わったおそらく私

が接した先生の中で、もっとも尊敬する先生だろう。その魅力は、われわれに対して、同じ人間として対応したからだろう。そういう自分達に対して、きちんと接する人は、心に

残るものだ。さて、「ミスター」は、今考えると、将来の職業自立を考えてた。例えば、牧

場にメンバーを連れていって、そこで、手伝いをしていました。しかし、子供達には、仕事が、きつくて、学園に帰ると、疲れてしまこの牧場の手伝いは、一二年でやめました。その他、地域の人との、交流の為、知り合いの、陶芸家の所に通ったり行きつけの、トンカツ屋で川柳を習ったり、喫茶店へ行ったりしました。充実した日々を、私達は過ごした。

ある日の事、私が、「学園にも新聞を出してみよう」と提案しました。提案は、受け入れられて、新聞を出す事になりました。嬉泉新聞の前身、『のびろタイムス』

です。この事が、私の人生に大きな影響を与えようとは、当時夢にも思っていなかった。『のびろタ

ィムス』で、私が、ペンを取ると、回りの人は、私に文才があると、評価しました。私自身は、ある種のプライドが芽生えてきた。

「ミスター」はある事情で、青年部を去りました。

ある日石井先生から、「裕、俺と共著で本を、書いてみないか」と勧められました。当時、私は、『のびろ』を卒業して成人施設『ひかりの』に入っていました。そして、『ひかりの』で、本格的な、職業指導がスタートして、私は、パン販売班に入りました。そんな中で、本原稿を考えて、書くから、大変です。多くの先生の助言を聞いて相談したりしながら、原稿を書きました。

パン販売は、施設暮らしの、長い私に、とって最初の社会との接触です。スーパの店頭でのパン販売は、細かいマナーまで気を使う場面が、多く正直いってしんどい。先生は、「いままでも施設暮らしが長かったから、しょうがない。これから、ひとつひとつ学んで行けばいい」とアドバイスしてくれた。その過程で、さまざまに、地域の人と触れ合うようになった。

私達が、店頭販売しているスーパの、店長さんが、筆者をかわいがってくれた。そのひとときは、



かつてミスター

仕事をするのが、楽しかった。

さて六一年夏、NHKテレビが筆者をメインにして撮影する事になった。この間撮影中は、緊張しながら出演していた。それでもマスコミの力は大きい。当時執筆中の、筆者にも「テレビ見たわよ」といっている人から反応がはねかえってきた。テレビでは、本の宣伝も、したから「本は、いつ出るの」と知り合いの人から問い合わせが殺到して私は返答に困った。六三年三月、石井先生との、共著がようやく出版されました。当事者が、本を書くという事は読者の方々には、新鮮な感動だった。ようです。この場を、借りて買っていたいただいた読者の方々に、厚く御礼申し上げます。

六三年一月、ガソリンスタンドに、週三日お手伝いする事に、なりました。社協の人の紹介によるものです。社会に一步踏み出したプレッシャーにめげず、頑張っています。しかし、実際、社会の中で、生きていける、自信は、ありません。変化する社会のテンポについていける自信がない。おそらく、就職は私の予想じゃ、遠い先になるだろう。いまは、いろいろ勉強しなきゃ、ならない事が、山のようにある。

こうして、のびろ十年の歴史を、私なりにふりかえってみました。

のびろ入園当時私の文章はカタカナだったのが、やがて人に、読みやすい字を書こうということでの今のひらがなに変えました。そして、ひよんな事からワープロで打つようになりました。この原稿もワープロで打ちました。

長くて、短い十年でしたけれど、いろいろな紆余曲折を、たどって今日をあゆんできました。これから先何があるか、『神のみぞ知る』。

(袖ヶ浦ひかりの学園在園生)

海外旅行の事

村岡 敦

今年、五月の末から、六月の始めにかけて、ぼくは、始めて、外国旅行をした。ジェット機は、日本国内では、九州へ行ったときにのったが、外国には、行ってない。ちょっと、不安でした。団体旅行で行くので、時間の決まっている時が多い。

まず、成田空港に、バスで行き、一時半ごろの出発だが、少し予定が遅れた。英国航空と言う会社のジェット機に乗った。と中、シベリアの、モスクワ、レニングラー



ドを通かした。下を見たら、氷みたいな物が見えた。あと、機内食が出た。あまり、機内では、ねなかつた。それで、ロンドンの、ヒースロー空港に付いた。ここでは、夕方六時ごろだが、日本だと、午前二時半ごろという事になる。次の日は、雨だった。雨の日が晴の日より多いらしい。国会き事堂があった。日本にあるのにていた。あとは、中国りよう理を食べた。バイキング方式でした。それから、自由行動で、地下鉄にのった。アウンスとかはなく、へんなかんじだった。でも始めてなので楽しかった。

そのあとは、イタリア↓西ドイ

ツ↓オーストリア↓スイス↓フランスの順でした。イタリアは、あつかった。まず、思い出にあるのは、カンツォーネです。聞いた曲もあった。ベスピオ山と言う、火山を見た。日本の火山ににいた。次の西ドイツだが、ライン川を下だった。むかしの城とかが多かった。あと、ミュンヘンオリンピックの時に、この町に地下鉄が開通したらしい。オーストリアはバスで行った。国境をこえる時、持ものをけんさした。それから、スイスにいて、びっくりしたのは、六月でも、山では雪が、ふっていた。登山電車を利用した。あんまり、天気にもぐまれなかつた。ジュネーブまで行った。ここから、フランスまでは、国鉄の特急にのった。グリーン車みたいな、車りようにのった。フランスでは、ベルサイユ宮殿を見ました。あとは、ルーブル美術館で、ちょうどくとかを見た。色がきれいだった。昼食はフランスりよう理で、エスカルゴ(かたつむりの料理)を食べた。けっこう、おいしかった。それから、エッフェルとうの、しや真をとった。パリでも地下鉄が走っていた。だいたいがこの旅行の思い出です。

(袖ヶ浦ひかりの学園在園生)

私たちの

うらやま

須藤福祉センター各事業所からの報告

袖ヶ浦のびる学園

開設十周年特集

わたしたちの「袖ヶ浦のびる学園」が開設以来十年を迎えました。これを記念して、初代園長の小野双葉氏と現山根園長にこの十年を振り返ってもらいました。

試行錯誤の十年

山根 美江子

昭和五二年一二月、袖ヶ浦のびる学園が開設した。

この時いくつかの新聞社が来て取材を受けた。その取材の中にも必ず出て来たのは、子供達の日課を具体的に教えてほしいということだった。

当時は、日課の必要性をあまり感じていなかったことは事実で、決まっていた事は、起床は七時から、朝食は八時から、昼食は一二時からで夕食は一七時半から、入浴は一八時から二一時まで、消灯は二二時から、ということ、日

課というより、子供を追立てる様な生活をせず、子供のペースにあわせて生活をさせることに重点がおかれていた。これをいくら石井先生が説明しても具体的な日課を聞き取れなかった。しかたなく、起床は七時から、朝食は八時から、それから少しゆっくりして散歩に行く、これが午前の日課、午後は、昼食が一二時から、で少しゆっくりしてから散歩に行く、と説明していた。それを聞いた新聞社の人は「また散歩をするんですか?」「またここでもゆっくり休むわけですね」と、念をおしていたのが印象的だった。

る学園の建物だけが建っていて、遊具といえば中庭にブランコとスベリ台だけがあっただけなので、散歩をするより他にやりようがなかったことを思い出す。

この、都会から遠く離れた、のんびりした学園の生活には、私がそれまで接したことの無いような現象が次から次へと現れて、笑ったり、「どうしてなのだろう」と思ったり、子供達に接して困惑したり、子供と職員との喜怒哀楽の生活があった。今から思うと私の記憶の中に「あんなに面白かったことはない」と思えることがある。

昭和五三年一月頃から精薄と判定された子供達が入園してきた。この子供達は気に入らぬ事があると群れをなし、口うらをあわせた様に「家にかえっちゃうぞー」と先生達を脅した。グループ指導が一日一回あって、私も半年間担当した事がある。全員手作業は不器用、口は達者、課題や作業を考えても一人でも出来ない人がいると、周囲はうるさくのものしり、当人はシュンとなる。全員が気持ちをあわせて出来ることは、紙をちぎる作業だった。毎日、今のひまわり組の部屋でおかしな事をやっっては表彰式をやっつて、頭の上からちぎ

った紙ぶぶきをまいていた。単純なことであるが、子供達はあきずに毎日要求して、心から歓喜の声をあげてくれた。

しかし、楽しく平和な暮らしをしていた子供達とは反対に、この子供達の親は、作業や勉強を指導してくれないことに不満を持って、退園して行った。信頼を得ることが出来なかった残念さが残った。

一方、自閉傾向のある子供達も次から次へと「どうしてなの?」と疑うような事をやっていた。そのいくつかを紹介してみたい。

H君は、月曜日に来園すると必ず、現在のほなぞの組の台所の窓から陶器の湯のみを二個投げて割った。

ある人は、風呂場にあるシャワーをあびる時は、洋服をぬぎ裸であるが、玄関ポーチに設置してあるシャワーで水あびをする時は洋服のままであった。真夏の陽に照らされ、洋服を着たA君がシャワーをあびている姿は、まるで絵のようだった。当時、絵の指導をしていた長谷川甚之助氏は、写真をとって我々職員に楽しく話してくれた。

また、のびる学園の建物を知っている人は、各玄関ポーチに白い丸いかさでおおわれたしゃれた電

灯をご存知でしょう。朝六時になると、その丸いかさを全部割って歩くという子供が現れた。中庭には四個の電灯があり、当時、一個五千円もするものであったから、なんとかしてやめてもらわねばならなかった。「白い丸い電気は割らないでね」と、言ってもおおむがえしをするだけで、一向に解決の方向にはむかなかった。

今思えば、昔はこんな事に四苦八苦していたのかとおかしくなる。

第二種自閉症児施設認可後、子供達の問題が変わってきて、大人が危険にさらされる様な乱暴をどう解決するか、破壊をする子供達の指導をどうするのか等危険な問題や、大小便のきたない問題等が切迫してきた。それから比べると昔出会った問題は、ほほえましく感じられるものが多かった。一つの問題があった時、皆が首をひねり、よく観察しての試行錯誤だった。そして、その事がきっかけとなって、指導体制が一つ一つ積み重ねられて行ったように思われる。

初めて都の指導監査を受けた時、どの様な書類が必要なのかも分らず、熱心な監査指導にも雲をつかむ様な状態であったことを記憶している。その中から、体制を作って形に現していくことが必要だと

いう事を感じたことは確かであった。

今ある家庭指導の体制、医務体制、給食体制、環境整備の体制等、全てに一〇年の歴史がある。これ

袖ヶ浦のびろ学園

開設十周年記念事業開催さる

記念行事は、日を分けて千葉と東京で開催されました。

千葉会場は、千葉県関係の方々や地域で日頃お世話になっている方々を中心に招きし、九月十七日袖ヶ浦の学園で開かれました。



らを一つ一つあげることが出来な
いが、今までの一〇年間は、試行
錯誤の中から体制を作り軌道に乗
せてきた時代であった様に思える。
(袖ヶ浦のびろ学園園長)

第一部の式典では、ご来賓の千

葉県社会部障害福祉課長の森山幹
夫様、袖ヶ浦町住民福祉部長の長
谷川二三男様よりお祝いのおこと
ばを頂き、須藤祐司理事長のお礼
のご挨拶やビデオをまじえた一〇



年の活動報告が行われました。
ひきつづき催されたパーティー
では、ご来園のみなさまが和気あ
いあいとご歓談ください、そして
最後に袖ヶ浦のびろ学園と今年出
来上がったばかりの選択的作業棟
を中心に見学ツアーが行われまし
た。

また、九月二三日には、東京澁
谷の子どもの城において、東京会
場が開催されました。

式典では、厚生省児童家庭局障
害福祉課専門官の中沢健様、東京
都福祉局障害福祉部精神薄弱者福
祉課長河津英彦様からお祝いのお
ことばを頂き、須藤理事長のお礼
のご挨拶、さらに石井哲夫常任理
事と山根園長によりビデオを上映
しながらの袖ヶ浦のびろ学園一〇
年の歩みが紹介されました。

つづいて開かれた祝賀パーティー
では、日本社会事業大学の平田
富太郎学長の乾杯の音頭とともに、
そこそこに歓談の輪が広がりなが
やかな雰囲気が続きました。

